

国立民族学博物館の収蔵品②

現代のアイヌ・アート



左から「アイデンティティ3」、「藤戸タケ像」、「ユーカラクル」



「現代そして未来」のセクション 中央にはドレスやイラスト、タペストリーなど現代の作品を展示している。

リニューアールした「アイヌの文化」展示では、伝統文化を継承しつつ新たなアイヌ文化を創造する人びとの姿を紹介している。

旧展示は、交易、衣類、住居、生業、信仰、工芸といったテーマで伝統的なくらしを解説するものであった。開館前のみんぱくには、他機関から移管された明治後期から一九五〇年代までの古い民具はあったが、アイヌ文化を体系的に展示構成できるだけのものは揃っていなかった。そのため、「アイヌの文化」展示場が公開された一九七九年前後を中心に、北海道のいくつかの地域で民具を新しく製作してもらい、それらを収集して、コレクションを充実させた。

こうした経緯で作られたので、作者が明らかかなものも多かったのだが、旧展示では資料のキャプションには氏名は書かれていなかった。民具は、かつては誰でもがつくっていたものだと考えから、作者が誰かは重要視されなかった。また、差別やねたみなどを避けるため、個人名を出すことがはばかられた時代でもあった。

一方、新展示では、旧展示のために復元されたものを除き、作者がわかる（ご本人や遺族の同意をえられた）ものは、氏名を明記した。また、新展示のために作家から直接購入した作品を中心に、プロフィールも紹介している。

たとえば、展示の入口では、三つの木彫作品が迎えてくれる。中央の等身大の「藤戸タケ像」は、作者である藤戸竹喜さん（一九三四―）の祖母をモデルにしている。「木彫り熊」が原点という藤戸さんは、その精巧な技術と表現力で他の木彫家たちから一目置かれる存在で、近年ではJR札幌駅に展示中のモニュメントのメイン像も手掛けた。

その右側は、床ヌブリさん（一九三七―二〇一四）の「ユーカラクル（語り部）」という作品で、古老の口元からはアイヌ語が低く静かに流れてきそう。そして、左の「アイデンティティ3」と題された貝澤徹さん（一九五八―）の作品は、服のファスナーの奥に伝統的なアイヌの文様を描いたものである。ファスナーの開け具合で、アイヌであることを表に出したり隠したりという心の内を表現したものだ。

さらに、「現代そして未来」というセクションでは、アイヌ民族の社会的な地位向上を求めて活動をした先人のあゆみとともに、アイヌ語や音楽・芸能などの文化継承の取り組みを紹介している。ここでは、木彫や織物・刺繍などの伝統的な工芸品も並べているが、「工芸」の枠を超えた作品も展示している。

たとえば、貝澤珠美さんのドレス、小笠原小夜さんのイラスト作品、そして川村則子さんのタペストリーなど。ほかにもiPhoneケースやアクセサリなど現代の生活で使う小物や、部屋に飾りたくなるような作品を多数お見せしている。

同時代を生きる作者たちが、いまの日本でどのようにアイヌ文化を継承して行こうとしているのか、新しいアート作品から感じられるだろう。

（齋藤玲子）